

記憶の品

をたどって

7

tadotte@asahi.com

何の変哲もない、さびたペンチ。前橋市の元高校教諭、堀泰雄さん(75)が2013年

夏、福島県南相馬市の海沿いの共同墓地で見つけた。まだ所々に墓石が倒れていた。

津波で流されてきたペンチだろうか。それとも、震災後に、たまたまだれかが落としたのか。

見せてもらった私は、持ち主はわからないだろうと思いつつ、共同墓地近くの農地で偶然見かけた男性に声をかけた。

南相馬市職員の平田三男さ

ん(58)だった。休日を利用して、機械で水路脇の草を刈っていた。

原発事故の影響で、広大な田んぼでつくるのは飼料用のコメだ。ペンチを見て「墓で使うのかな」と首をかしげる平田さんと、しばらく話をした。共同墓地にあった墓が津波で流され、ようやく昨年12月に再建したという。

完成したばかりの墓は、震災前より一回り大きい。脇には、津波で行方不明の愛犬ピーンズの小さな墓が立つ。

共同墓地は、国の復興交付

海沿いの墓地 さびたペンチ



福島県南相馬市の共同墓地に残されていたペンチ



かさあげされた共同墓地で墓の再建が進む。福島県南相馬市



金を使って15年6月に再建された。130区画のうち、墓が立つのは約3分の1だ。

一帯は災害危険区域に指定され、もう住宅はない。でも地区の人たちは、共同墓地を元の場所に残した。海沿いなので、敷地を2倍ほどかさ上げした。

「もともと私たちは海の民。海の近くに住めないのなら、最後に眠る地だけでも、波の音を聞いていたい」。平田さんの父も漁師だった。

墓は再建したが、遺骨は見つからない。墓があるところの土を納めた。

被災地では遺骨のない墓は珍しくない。ある家族は、行方不明の子が震災の日の朝までパジャマ代わりに着ていた

ジャージを、洗濯しないで骨箱に入れている。私が住む岩手県釜石市の寺で聞いた。七回忌に墓に納めるそうだ。結局、さびたペンチの持ち主はわからない。

連載で何度か紹介した堀さんと出会ったのは、昨年6月だった。釜石市内の仮設店舗

「はまゆり飲食店街」の居酒屋で、隣り合わせになった。腹話術人形「ケンちゃん」と一緒に仮設住宅を回っている

という。翌日、同行取材の途中で、震災3カ月後から、地面に残されたりした小さな品物を保管していると聞いた。

「持ち主に届けるまで預かっておくという気持ちです」

震災から間もなく6年。持ち主をたどるのは、ますます

難しくなる。そう思って、取材を始めた。持ち主や関係者に戻った品もあれば、わからないままのものもあるが、堀さんの「そのまま放っておくことはできない」という思いを、追体験するような取材だった。

あのペンチにしても、震災とは関係ないのかもしれない。それでも被災地で見つけると、どうしてもここにあるのかを思う。遠くに行ってしまう人、あのころの日々のくらし……。思い出をたどるのに、品物がよすがになることもある。何ということのない日常のものが、大切な品になる。

(山浦正敏)

◇次は「続・南の国境をたどって」です。